

このコーナーでは、弥富市のまだまだ知られざる歴史について、弥富ふるさとガイドボランティアが紹介していきます。



横綱大錦の石灯籠

鍋田神明社から北へ国道 23 号線を越えると、稲元の彦九田神社に横綱大錦の寄進した石灯籠一対があります。

明治 16 年に稲元に生まれた大錦は幼名を吉三郎といい、子どもの頃から力持ちで「稲元の金太郎さん」と呼ばれていました。13 歳で伯父を頼って京都に移り住み、車大工の仕事を手伝っていましたが、19 歳の時に京都の関取の紹介で京都相撲に入りました。のちに大阪相撲に移って「大錦大五郎」と名乗り、大正 7 年、第 28 代の横綱となりました。

横綱在位中には木曾川の河川敷で大相撲を興行し、故郷に錦を飾ったということです。

これまで愛知県出身の横綱は、大錦と蒲郡出身の玉ノ海の二人だけです。



大錦の石灯籠

市長の部屋



白い息に冬の訪れが感じられるこのごろ、皆様にはつつがなくお過ごしのことと存じます。

さて、師走を迎え、本年もたくさんの感謝や反省をして振り返る時期となりました。未だ終末が見えない新型コロナウイルス感染症ではありますが、市民の皆様のワクチン接種を始めとした感染防止対策へのご理解とご協力に感謝申し上げます。新年早々の終末を願っております。

年末ご多忙の折ではございますが、皆様方のご無事息災を心よりお祈りいたします。

弥富市長 安藤正明



「平和をつなぐためには」

【広島平和記念資料館にて】

薄暗い部屋を歩いていくと、いろいろな展示物が目に入ってきた。全て戦争の悲惨さを表すものだった。中には、被爆者の遺品や原爆の恐ろしさを示す絵、写真などがあつた。その展示物の多さから、原爆一つでどれだけの人が心に傷を負ったのか伝わってきた。目を背けたくないような絵や写真が多くあり、当時の人々が見た光景が頭に入ってくるような感じがした。先に進むと、原爆で亡くなっていった人々の写真とそのとき何をしていたか事細かに書かれていた。中には、自分と同じ年である子や自分より小さい子がいる。こんなに小さい子が被爆し亡くなっていったことがとても信じられなかった。ごく平凡な暮らしをしていた罪なき人々までも亡くなっていったという事実と、戦争というものの悲惨さと醜さが身に染みて分かった。

弥富中学校 松岡 宏幸



【平和をつなぐためには】

広島研修で思ったことがある。それは、戦時中と現在の生活の差だ。現在では、多くの子が学校に行き平和な生活を送っているが、戦時中では満足に食事できず、日々戦火に怯える生活を送っていた。中には、国のために戦争に駆り出されて散っていく人が大勢いた。そう思うと、どれだけ自分たちが良い生活ができていて平和な日々を送っているかということに気づかされる。生まれてきた時代が違うだけなのにここまで生活が異なることを実感させられた。現在の平和をつくってくれた先人たちには感謝しかない。

先人たちがつくり上げた平和をつなぐためにやるべきことは何なのか考えた。

一つ目は、戦争の悲惨さを次の世代につなぐことだ。現在、戦争を経験した人々はどんどんいなくなっている。だから、僕たちが戦争の経験を語り継がなければいけない。

二つ目は、戦争の悲惨さを伝えるために展示されていた展示物を永遠に残していくことだ。この展示物は先人たちが当時の技術で残した言わば、平和の象徴だ。展示物を見るだけで戦争の悲惨さが伝わってくるこの象徴を残していくことで、平和を願う人々を国境を越えて増やしていけると思う。

広島研修を終えて、戦争の悲惨さを知ったからこそ今の生活があることを理解した。平和に向けて自分たちができることを日々模索する第一歩にしていきたい。

「平和のために」

【平和記念資料館を見学して】

弥富中学校 伊藤 洵

広島研修の2日目に、私たちは平和記念資料館を見学した。資料館には、戦争に関するたくさんの絵や写真、遺品などが展示されていて、その中でも特に印象に残ったものがある。それは、被爆された方々が描いた絵である。原子爆弾が投下された直後の、大やけどをした人たちが水を求めてさまよう姿、やっと見つけた川へ必死で飛び込む姿、戦火に逃げ惑う姿など、当時の悲惨な状況を描いた絵がたくさんあつた。どれも見ているだけで心がしめつけられるようなものばかりだった。そして、信じていた光景を描いたものも多く、この絵は本当に現実で起きていたのかと、疑問に思うほどだった。しかし、全て現実で起きていたことで、改めて戦争の恐ろしさを実感した。資料館に展示されていた全ての絵が、戦争を知らない私たちに、戦争を起こしてはいけない理由を、静かに語っているように感じた。そしてこれからも、多くの人にその理由を伝え続けてほしいと願っているように感じた。



【平和をつくる】

戦後 76 年、戦争を体験した人は年々少なくなっている。当時のことをあまり知らない私たちが戦争について語り継いでいくことは、とても難しいことである。戦争を体験した人の中には、思い出したくない、もう戦争の話はしたくない、という人も少なくない。当時の悲惨な状況を思い出すこと、それを語ることは、つらく苦しいことで、忘れてしまいたい、封じ込めてしまいたいという思いもあるかもしれない。それでも今まで、絵や写真、当時のまま残してあるものなど、さまざまな形で、戦争について語り続けてくれた人たちがたくさんいる。その人たちの思いを受けとめ、そして、私たちの未来につなげていくためにも、これからも戦争について語り続けていくことが大切である。平和記念公園や平和記念資料館など、戦争について学べる場所やものを残すこと、平和学習や研修などで学ぶ機会を作ること、そして何よりも戦争を忘れないことが、私たちにできる「平和をつくる」ための第一歩だと思う。私たちの一歩はまだまだ小さく、歩みの遅いものかもしれない。それでも、平和のために何かできるかを真摯に考え、実行していくことが何よりも大切だと思う。